

論文の要旨

論文題目	在日ブラジル人中学生の作文能力における バイリンガリズムに関する実証的研究
氏名	生田 裕子
学位	博士（学術）
授与年月日	平成 14 年 12 月 13 日

本論文は、在日ブラジル人中学生の日本語及びポルトガル語による作文を収集し、日本人中学生、及びブラジル在住の中学生の作文と比較することによって、彼らのリテラシーにおける両言語併用能力の実態を明らかにしようとしたものである。

まず、「日本語の作文能力と滞在年数の関係」については、(1) 作文全体の長さ、一文の長さ、従属節の使用状況から見る文の複雑さ、構成と内容は、滞在 3 ~ 4 年で日本人生徒と同じ水準に達すること、(2) 語彙の多様性、文の広がり（並列節の使用）が日本人生徒と同じになるには 4 ~ 6 年かかること、(3) 文法・語彙の誤用は 6 ~ 10 年たっても日本人生徒より多いことが判明した。

次に、「ポルトガル語の作文能力と滞在年数 / 出国年齢の関係」を検討した結果、(1) ポルトガル語による作文能力は日本での滞在年数より出国年齢による影響が大きいこと、(2) 日本在住のブラジル人中学生とブラジル在住の中学生の間に最も差があるのは「語彙の多様性」で、出国年齢が低いほどブラジル在住の中学生との差が大きいこと、逆に文の構造（文の深さ、一文の長さ、従属節の割合、使用している従属節の種類）に関しては差が見られないことが明らかになった。

さらに、「日本語能力とポルトガル語能力の関係」を検討し、言語の表層面で観察できるトランスファーは表記・語彙・構文と様々なレベルで起こること、またポルトガル語から日本語へという一方向だけでなく、日本語からポルトガル語にも起こることを確認した。続いて、作文能力の 5 つの側面（産出量・語彙の多様性・文の構造・誤用の頻度・構成と内容）を比較し、2 言語間で相関があるのは産出量・語彙の多様性・構成と内容であり、相関が見られないのは文の複雑さ・誤用の頻度であることを示した。そして、Cummins の「共通基底言語能力」という概念を援用し、2 言語で相関のある 3 つの側面がこの能力を反映しているという結論に至った。

最後に、「日本語 / ポルトガル語の作文能力と暦年齢の関係」について論じ、日本語の作文能力は中学生の年齢層では暦年齢と関係がないこと、ポルトガル語の場合は、現年齢より出国年齢の影響が大きいことを示した。

以上の結果を踏まえ、学齢期に移住した年少者の場合、第二言語である日本語が発達するまでの間に、すでに身につけているポルトガル語を保持する必要があること、さもなければ、いずれの言語においても「書く」という手段を失ってしまうという危険性があることを指摘した。

